

## 開会挨拶 済生会理事長 炭谷茂氏

済生会理事長の炭谷です。今日は、お休みのところ、このようにたくさんの方にお集まりいただき、本当にありがとうございます。

今回で第6回目となる生活困窮者問題シンポジウムを開催しますが、済生会がこのようなシンポジウムを開いている趣旨について少しご説明したいと思います。済生会は、当地愛知県においても、愛知県済生会リハビリテーション病院をはじめ、障害者の施設などを経営しています。済生会は、明治44年に明治天皇がつくられ、今年で106年の歴史がありますが、なぜわれわれ済生会が設立されたのかというと、普通の病院や福祉施設をつくるつもりではまったくなく、医療サービスや福祉サービスに恵まれない人たちに対して支援をしていこうという趣旨でつくられたわけです。

この理念と使命は、今日でも脈々と生きていて、われわれの紋章はなでしこですので、現在「なでしこプラン」というものを制定して、生活困窮者に対する支援を行っております。今日皆様方にお配りした封筒の中には、「いのちの最終ラインを」という冊子が入っておりますので、これを後ほどご覧いただければおわかりいただけると思いますが、国や地方自治体、他の団体が逃げても、私たちは社会の最後を守るという気概で仕事をしているわけです。

一例を申しますと、東京都のホームレスは国立病院や都立病院がホームレスの診療にあっているわけではなく、われわれ済生会中央病院が中心になって診療を引き受けています。また、釜ヶ崎においては、8年前から済生会の八つの病院が200名の医師やナース、MSWを導入し、釜ヶ崎に居住している約1,000名の人たちに対して無料で診療活動を実施しています。また、もっと西に参りますと、3年前から山口刑務所で受刑者に対して昔で言うホームヘルパー2級にあたる研修を実施していますが、かなりの成果で、現在はホームヘルパーの研修を終えた人たちは済生会の福祉施設で働いていただいています。

これはほんの一例ですが、まだまだ生活困窮者の問題はたくさんあります。日本の社会は、家族や地域社会がますます変化しております。また、所得の格差が拡大し、貧困層が増加しております。したがって、生活困窮者の問題は一層増大するとともに、複雑化していると思います。そのような中であって、われわれ済生会がやるべきことはもっとあるのではないかと考えております。

今回のシンポジウムについては、子どもから路上生活者まで幅広い層を取り上げたわけですが、シンポジストを引き受けていただきました先生方に厚く感謝を申し上げたいと思います。また、このシンポジウムを行うにあたっては、愛知県済生会リハビリテーション病院に大変ご努力いただいた点について御礼申し上げます。本日のシンポジウムが皆様方にとって大変有意義であることをお祈りして、私のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。